

# サッカーW杯2014におけるサイドアタッカーの特徴

加藤 大樹 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 山田 庸

キーワード：香川真司，ディマリア，ペナルティエリア

## 1. 諸言

現代サッカーは、サイド攻撃が重視されている。有力なサイドアタッカーを擁する日本およびアルゼンチンにどのような特徴が見られたのか、選手のプレー種別や地点を記述分析することが必要である。本研究では、FIFAワールドカップ2014における日本代表の香川真司とアルゼンチン代表のディマリアについて、ボールを持ったときのプレーを比較検討することを目的とした。

## 2. 研究方法

FIFAワールドカップ2014日本代表と、アルゼンチン代表のグループリーグ3試合の香川真司とディマリアがボールを受けた計210プレーを対象とした。ボールを受けた位置およびドリブル、パス、シュートの位置と方向を記録した。測定誤差を最小化するためにピッチの縮尺図を用いて記録した (Suzuki and Nishijima, 2002)。プレーの軌跡が描かれた縮尺図を観察し、動画と照らし合わせプレーの質的分析を行った。

## 3. 結果と考察

香川、ディマリアとも左サイドを中心として攻撃を組み立てていた。また、サイドだけでなく中央へも入り込みプレーするスタイルは共通していた。

一方、両選手には決定的なプレーの違いが見られた。第1に、ディマリア選手がほとんどのプレーで前を向いてプレーしていたのに対して、香川は特に第2試合まで前を向いたプレーがほとんど見られなかった。第2に、ボールを受ける回数が香川よりもディマリアのほうが多かった。第3に、ディマリアは左

サイドから右サイドへのロング、ミドルパスがあつたが、香川は長い逆サイドへの展開が全くなかった。第4に、ディマリアのほうが左サイドを深く突破していた。第5に、香川はペナルティエリア内からのシュートが0本であるのに対して、ディマリアはペナルティエリア内からのシュートが4本だった (表1)。第6に、ペナルティエリア内へのパス回数では、ディマリアが大きく上回っていた (表2)。

## 4. まとめ

ディマリア選手の方が香川真司選手よりもペナルティエリア内でのプレー、シュート数、ドリブルの回数、ボールを受ける回数が多く、ボールを受ける位置が香川真司選手よりも高くよりゴールチャンスが多い。

## 引用参考文献

Suzuki, K. and Nishijima, T. (2004) Validity of a soccer defending skill Scale (SDSS) using game performances. International Journal of Sport and Health Science, 2: 34-49.

表1 シュート回数

	第1試合	第2試合	第3試合	合計
香川	vsコートジボワール 0本	vsギリシャ 0本	vsコロンビア 4本	4本
ディマリア	vsボスニア 0本	vsイラン 3本	vsナイジェリア 6本	9本

表2 ペナルティエリア内に出したパス回数

	第1試合	第2試合	第3試合	合計
香川	vsコートジボワール 1本	vsギリシャ 2本	vsコロンビア 4本	7本
ディマリア	vsボスニア 5本	vsイラン 14本	vsナイジェリア 4本	13本